

高度成長期の産業転換と青年たちの人生回顧
炭鉱閉山 50 年後のフォローアップ調査

笠原良太（早稲田大学）

1. 問題設定

大規模な産業構造の転換は、地域・学校・家族の状況を介して、子どもたちに多大な影響をもたらす。これまで、戦後日本における石炭産業の構造転換を中心に、教育学や教育社会学の領域から、青年たちにもたらす短期的影響（学力低下、生活態度の悪化など）が明らかにされてきた（林 1983; 新藤 2015 など）。しかし、彼らがその後、どのような人生を送り、人生を再検討しているのかというライフコース論の視点に立脚した研究は、離職者研究の豊富な蓄積（正岡ほか 1996-2007; 高橋編 2002 など）に比べて少ない。高度成長期に炭鉱の閉山を経験した青年たちは、現在、中年期から高齢期に移行し、人生を再検討する段階にある。そこで、本報告では、当時の青年たち（中学生）へのフォローアップ調査の結果から、青年期における産業転換との遭遇がライフコース全体にもたらす長期的影響を明らかにする。

2. 対象・方法

本報告の対象は、1970年2月に閉山した尺別炭鉱（北海道旧音別町）である。炭鉱閉基によって成立した尺別炭山コミュニティは、閉山によって崩壊し、全住民（約4,000人）が半年以内に転出した。閉山と地域崩壊が中学生（閉山時在校生354名）にもたらした短期的影響については、閉山直後の作文分析等から明らかにされている（嶋崎・笠原 2016; 新藤 2016; 笠原 2018）。本報告では、これらの知見に加え、閉山時の中学1・2・3年生を対象とした追跡調査の結果をもとに、成人期への移行（進学・就職）ならびに中年期・高齢期における人生の再検討との連続性・不連続性を明らかにする。

追跡調査は、2016～18年に各学年の同期会を通じて実施した（質問紙調査：49名、うち協力者に対するインタビュー調査：29名、産炭地研究会との共同研究）。インタビュー対象者のうち16名は、閉山直後の作文が保存されていたため、2時点データを結び付けて分析する。また、本報告では、閉山時の教員（2名）に対するインタビュー調査の結果をもとに、学校教育ならびに同期会の特徴についても確認する。

3. 結果

① 成人期への移行：中学生たちは、閉山と強制的移動によってライフコースが攪乱したが、大半が高卒学歴を取得して成長産業に就職するという標準的な成人期への移行を達成した。しかし、大学等進学は、道外・道内都市部転出者（父親の産業転換）で多く、地元残留者（父親の再就職の遅れなど）では抑制されるなど、家族の転出先・再就職先およびタイミングによって差異が生じた。

② 人生の再検討・閉山に対する評価：彼らは、中年期から高齢期にかけて、同期会を結成して再結合し、閉山や故郷について振り返っている。閉山に対する評価は、おおむね上記でみた転出先・親の再就職先によって異なる。すなわち、道外・道内都市部転出者は、都市生活への適応難を想起するとともに、閉山によって大学等進学や成長産業への就職が可能になったと肯定的に評価している。一方、炭鉱周辺に残留した者や進路変更を経験した者は、作文に表れていた「取り残された感覚」を高齢期まで抱え、閉山を否定的な転機として捉えている。

4. 結論

以上のように、1970年の「閉山＝地域崩壊」を経験した青年たちは、高度成長ならびに高学歴化という時代背景、家族のスムーズな再就職と転出先への適応、閉山直後の作文に表れていた目標（早期適応、標準的移行）を実現しようとする人間行為力が作用し、ライフコースの軌道を修正した。むしろ、本調査の回答者は、スムーズに移行した人たちに限られるという偏りが指摘されるが、彼らでさえも、中年期・高齢期にかけて、閉山の経験を鮮明に記憶し、人生を左右した転機として意味付けている。青年期における産業転換の経験は、その後の人生移行に累積的効果を有し、ライフコースに痕跡を残していたのである。

また、本報告で採用した作文執筆者へのフォローアップ調査は、資料の代表性、信頼性において制約があるが、回顧法による観測時点効果を避けるなど、遡及的なライフコース調査に新たな可能性を提示する手法である。

キーワード：成人期への移行、人間行為力、転機